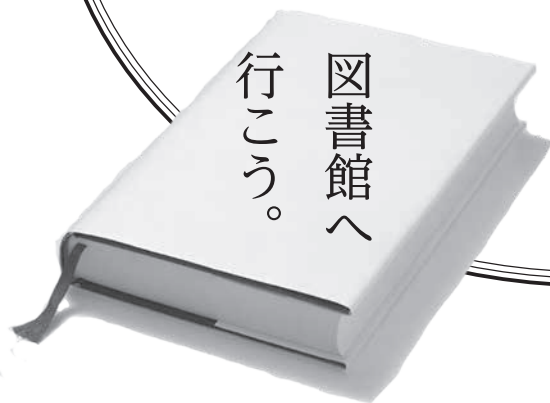




『「キャップが開けられない」「指が痛い・こわばる」人のお助けBOOK』

富永 喜代 著
出版者：主婦の友社

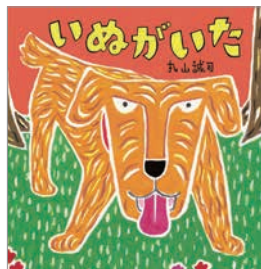
へバーデン結節、ばね指、手根管症候群、母指CM関節症…。代表的な手指の病気と症状を解説するとともに、手指の痛み・しびれを解消する「10秒神経マッサージ」を紹介する。



『いぬがいた』

丸山 誠司 著／出版者：絵本館

いぬがあくびをした、こっちをみた、ニヤリとした、かけだした、くぐった、とんだ、ぶつかった…。いぬと男の子の思いがけないふれあいで、できごと。愛嬌たっぷりのいぬの表情と、ほほえましい展開が楽しい絵本。



『成瀬は都を駆け抜ける』

宮島 未奈 著
出版者：新潮社

達磨研究会なるサークル、簿記YouTuber。京大生となった成瀬は新たな仲間たちと出会い、京都の街をひた走る。一方、東京の大学に進学した島崎のもとに、ある知らせが…。



もう一冊。

イベント

おしゃべり箱おはなしの会

3月28日(土)
午前10時30分～
図書館2階 講座室

3月の
休館日

毎週月曜日
祝日 20日(金)
月末整理日 31日(火)

問田布施図書館 ☎ 52-2288

HP <https://ilisod004.apsel.jp/tabuse-lib/>
E-mail library.tabuse@town.tabuse.yamaguchi.jp

一般	坂口 克
空き家まるごとDIY!	吉村 芳弘
ぜんぶわかる高齢者の栄養	京極 夏彦
猿	藤本 ひとみ
数学者と聖骸布騎士団	江國 香織
ブーズたち鳥たちわたしたち	砂原 浩太朗
武家女人記	五味 太郎
児童	モリナガ ヨウ
わたしとわたし	廣嶋 玲子
図解乗り物の歴史	石川 宏千花
ふしぎな図書館と魔物の館	アーノルド・ローベル
フエンシング部の王子さま	よにもめずらしいどうぶつたち

俳句短歌

周防一夜会

一年はあつとすぎ信号待ちは長い
想い出も古服も捨てきれぬ衣替え
緩やかな残りの人生 ハイスピードで過ぎて行く
老いきれない魂の燃えかすをくすぶらせている
「もういいかい」「もういいよ」彼岸花咲く
余裕ができヤキモチが逃げていった
寒いから心寄せ合う

短歌

花そよぐ小春日和にファアンファアンと
アサギマダラは舞い降りて来た
古里の山によく似た雲なびく
いずれ消えゆく里ぞ悲しき
欄干に蜘蛛の織りなす糸の技
朝日を浴びてレースのごとし
折々の風に運ばれて来て曲がれぬ
落葉が塀の角にくちゆく
まごの声に残りたの美しい
どんな家庭かのぞいてみたい

山口 綾子

小藤 淳子

甲斐 信子

部屋 慈音

藤井千恵子

小村みつ枝

下森 勇二

上岡 知雄

堀部伝兵衛

加藤 和子

吉村 京子

河村美喜子

第45回読書感想文コンクールにおいて、次のとおり入賞者を決定しました。

(受賞者名、学校(一般は自治会)名、学年、題名の順に表記)

優秀	田村 惟和	田布施西小	3年	でてこい ばくのほんまきもち
	井神 杏莉	麻郷小	6年	勇気をもって
	稲田 実咲	田布施中	2年	日本の水は流れすぎ
	岩本 愛一	田布施農工高	1年	生きる
優良	井上 來結	麻郷小	1年	ゆめへのちいさないつぱ
	河村 咲花	城南小	3年	この夏のちようせん
	羽部 悠真	城南小	6年	みんなちがつてみんないい
	國本 華凜	田布施中	3年	失われても輝き続ける瞬間
	魚崎 心羽	田布施農工高	3年	毒のアリバイ
入選	藤井千恵子	御蔵戸	一般	雑草に習う
	浜辺 椋	田布施西小	1年	じぶんのきもちをつたえよう
	松本 美咲	田布施西小	2年	わたしのともだち、シロツメクサさん
	西岡 瑛翔	麻郷小	3年	みんなちがつてみんないい
	吉木 楓	城南小	4年	みんなの「メガネ」知りたいな
	角本 丞	東田布施小	4年	平和を願うことができること
	山本 雪乃	城南小	5年	私のドラゴン
	岩本 愛理	東田布施小	6年	思いやりの大切さ
	林 万里名	田布施中	2年	何を見るか
	三浦日笑子	田布施中	2年	自分が自分であるための生き方
	高瀬 直翔	田布施農工高	1年	世界は美しくなんか無い。そしてそれ故に、美しい。
神崎 百花	田布施農工高	3年	全員の理想の形	

私たちと人権シリーズ

言葉の力

田布施町立東田布施小学校 校長 平田 俊文

『みなさん。これからは、子どもたちのことを男女関係なく○○さんと、「さん」を付けて呼びませんか。きつと優しくなれますよ。』

これは私が教諭だった頃、ベテランの女性教員の方が、職員会議で呼び掛けられた言葉です。

私はそれまで恥ずかしながら、子どもたち、特に男子児童に『さん』を付けて呼んだことはありませんでした。呼び捨ての方が親近感が沸き、子どもたちとの距離が縮まるだろうという勝手な勘違い、また、自分は教員、相手は子どもという関係から、名前の呼び捨ては当たり前だと思ひ込んでいました。

さっそく次の日から、全職員が男子児童、女子児童関係なく『さん』を付けて呼び始めました。私は子どもたちに、『さん』を付けて呼ぶことは相手を大切にする呼び方であること、相手が子どもであっても一人の人間として尊重する呼び方であること、お互いの心が穏やかになることを伝えました。私自身、最初は照れがありました。子どもたちも、戸

惑いを感じていました。しかし、続けていくうちにそれが当たり前になり、逆に呼び捨てをすることに抵抗を感じるようになりました。

間違ひなく変わったことは、私自身、心が常に穏やかになったこと、さらには、子どもたち一人ひとりをもそれまで以上に大切にするようになったことです。特に、子どもたちを指導する際には、『さん』を付けて子どもたちの名前を正しく呼ぶことで、冷静な自分でいられるようになりました。感情に任せて『怒る』のではなく、子どもたちの成長を促し、改善に繋げていく『叱る』ことが意識的にできるようになりました。また、子どもたち同士も『さん』を付けて名前を呼び合うことで、トラブルも減りました。

たった二文字の『さん』が私や子どもたちを変えました。言葉の力には改めて驚かされます。日常の言語環境はとても重要です。人権感覚を高める第一歩は、相手を尊重した呼び方をするところだと考えます。学校全体で『さん』が飛び交う環境をつくっていききたいと強く思います。

*「広報たぶせ」の点字版または音訳テープをお届けします。社会福祉協議会(☎53・1103)へお問い合わせください。